

大阪大学工学部生物工学系同窓会

尚醸会会報

第 27 号

大阪大学工学部

醸造工学・醗酵工学・応用生物工学・バイオテクノロジー（学科目担当）教室

同窓会

尚醸会バイオテクノロジーセミナー（同窓会）

本年度は対面形式とオンライン配信を組み合わせた、
ハイブリッド形式での開催とさせていただきます。

開催日 令和6年11月9日（土）
開催方法 対面形式（吹田キャンパス、サントリーメモリアルホール）および
オンライン（Zoom）のハイブリッド

プログラム

- 14:00 受付開始
- 14:30 総会
1. 次期役員の選出
(1) 次期会長 (2) 副会長の選任 (3) 次期幹事長の指名 (4) 監査の指名（継続も含む）
なお、幹事の入れ替えは予定しておりませんので現行幹事が引き継ぐ予定です。
役員選出に関する会則は本会報に掲載されていますのでご一読下さい。
 2. その他
- 15:00 講演会（バイオテクノロジーセミナー）
- 15:00-15:45 片岡 正和 氏
信州大学
大学院総合理工学研究科 准教授
(昭和62年卒,平成3年修士修了,平成6年博士修了)
「Be Free!: 研究を支える縁」
- 15:45-16:30 古園 さおり 氏
東京大学
大学院農学生命科学研究科 准教授
(平成3年卒,平成5年修士修了,平成8年博士修了)
「生物代謝における翻訳後制御+ α 」
- 17:00-19:00 交流会
開催場所は吹田キャンパス内を予定しております。
交流会参加費 5,000円

出席される方は、下記1～3のいずれかの方法でお申し込み下さい。
交流会参加の方は、2024年10月11日までに申し込みください。

1. 出席申込フォーム (URL: <https://forms.office.com/r/PbbtMqdAWg>)
(右記QRコードからもアクセス可)
2. E-mail (doso@bio.eng.osaka-u.ac.jp)
3. 同封の用紙にて Fax または郵送

当日までに参加申し込み時にご記入いただきましたメールアドレスに Zoom の参加に必要な情報をお送りいたします。



出席申込フォーム ↑

目 次

巻頭言	高松 智	1
教室の最近の動向	渡邊 肇	2
各研究室の近況		3
同窓生の近況（工学研究科長・工学部長に就任して）	大政 健史	7
教員紹介	安本 周平	8
<<同窓会通信>>		
阪急千里線「北千里」発、大阪メトロ御堂筋線「なかもず」着 近況報告：2つの研究室を主宰して	岡澤 敦司 古澤 力	9 10
令和5年度 尚醸賞の授与		11
令和5年度 工学賞を受賞して	鳥井 奈津実	12
令和5年度 尚醸会バイオテクノロジーセミナー 報告	安本 周平	13
令和5年度 尚醸会企画 OB・OG 懇談会開催報告	新聞 秀一	14
卒業後41年、コロナ禍を超えて7年ぶりの同窓会は母校訪問	上田 太郎 谷口 貴之 宮階 定憲	16
法隆寺	松田 祥吾	17
令和5年度タイ派遣プログラム・SSSV学生へのご支援に対する 御礼と報告書	藤山 和仁	20
令和5年度 同窓会会計報告		
大阪大学工学部 醸造・醗酵・応用生物工学科同窓会「尚醸会」会則		
同窓会現組織・会員の動向		
●教職員の異動		
●会員訃報		
●令和6年3月卒業、修了生進路等		
●教室の構成		
●クラス会幹事		
会員各位		

巻頭言

高松 智（昭和 44 年卒）

皆さんは最近の日本企業の不祥事の多さをどのようにお考えでしょうか。例えば、トヨタ・ダイハツのデータ改ざん、三菱自動車のリコール隠し、東芝の粉飾決算、近畿日本ツーリストのコロナ過大請求、日医工や小林化工の後発医薬品メーカーのデータ捏造、ビックモーターの保険金詐欺など、該当企業に知名度や規模に係わらず切りがありません。企業不正でネット検索すると「不正リスク対応ハンドブック」、「企業不正対応の実務」、「不正・不祥事への初動対応」、「従業員不正の防止と事後対応」、「企業不正の研究」、「業種別不正パターンと実務対応」、「なぜ企業は不正を繰り返すのか」など多くの本が出版されており、この問題が広く認識されていることを示唆しています。私が医薬品企業に就職した 1974 年は日本では GMP 制度がスタートする時期であり品質保証という言葉がまだ認知されていない時期でもありました。品質管理という言葉は品質試験と同義語であり試験室とか検査所という言葉の組織が存在していました。組織として考えると、表向きは別として実質的には製造部長は品質管理部長よりも上位にありました（個人的な見解です。製造部門の方は試験についても詳しいが、試験部門の方は製造方法に関しての情報あまり持っていない。）。製造工程でミスがあっても揉み消し易い体制でした。品質試験部門でのデータ改ざんや捏造も容易な体制であったと感じます。GMP が認知されるようになり品質保証部長が出現し製造部門や試験部門の上位に立ち最終的な出荷の可否を決定する立場になりました。品質保証部門の担当者がロットごとに製造記録と試験記録をチェックするシステムになりました。品質保証部門が原材料のメーカー作成試験成績書をチェックするだけでなく実際に正しく品質試験されているかそれらのメーカーを査察することも大切な業務になりました。このように品質保証システムがより良くなりましたが、それでも多くの不祥事や不正が発生しています。防ぐシステムがあっても無能な上司の管理体制や担当者の手抜き作業やその報告が原因で不祥事を止めることは出来ていません。

ここで問題になるのが、強い権力を持つ品質保証部長に適任なのはどのような経歴を持つ人かということです。それは案外簡単な問題です。製造部長を品質保証部長に配置換えすれば良いのです。人はポジションによって思考や行動の方向性が変わるものなので間違った判断をする可能性は小さいと思います。

新しい技術を導入する際技術移転という言葉があります。日本人はこの技術移転の力が優れており短時間にスムーズに移転させることを得意にしています。諸外国でもこの技術移転は案外問題なく実施されているようです。ところが品質保証システムの移転は簡単ではありません。品質保証システムは一種のカルチャー（文化）であり、カルチャーの導入が簡単ではないように品質保証システムの移転には従業員の教育・訓練に長い時間を要すると考えるべきです。最初述べた多くの企業での不正の発覚には、このような事情があることを認識すべきだと思います。

最後に、広報会議編集部が危機管理の専門家の意見をもとに選定した 2023 年 1 月から 10 月に発覚した不祥事のランキングを示し、注意喚起にしたいと思います。1 位：ビックモーターの保険金不正請求、2 位：ジャニーズ事務所の性加害、3 位：回転すし店の迷惑動画、4 位：日大アメフト部の薬物問題

教室の最近の動向

2024 年度生物工学専攻専攻長
バイオテクノロジー学科目学科目長
渡邊 肇

まず今年度からの工学研究科長、工学部長として当専攻の大政健史先生が選ばれました。醸造学科からバイオテクノロジー学科目に至るまでの当教室の長い歴史の中で、初の研究科長になります。専攻だけでなく今後の研究科の発展のためにもご活躍を願っております。

2020 年の初頭からの新型コロナウイルスによる教育研究における影響は多大なものがありましたが、ようやく平常の教育・研究ができるようになり、講義室や研究室に活気が戻りつつあります。あわせてコロナ対策で始まったオンラインの授業や講義なども併用し、以前とは少し異なった教育研究活動を行っています。バイオテクノロジー学科目に名称変更して 4 年目になり最初のバイオテクノロジー学科目の学生が卒業する年度となっております。

応用自然科学科に入学した学生は学部 2 年次に分属があり、それぞれの学科目に分かれていますが、近年はバイオテクノロジー学科目が学生に人気が高く第一希望の学生で占められており最終的に 59 名が分属されました。またしばらく前から導入されている推薦入試制度においてもバイオテクノロジー学科目の人気は高く、今年度は推薦枠の定員 22 名に対して 10 名（うち 8 名は女子）がバイオテクノロジー学科目を希望して入学してきています。

博士後期課程の学生数も増加し、現在当教室には、英語コース所属の大学院生を含め、博士後期課程 84 名（日本人 49 名、英語コース 35 名）、博士前期課程 131 名（日本人 110 名、英語コース 21 名）、学部研究室配属学生 59 名が在籍しております。

現在、専攻教員として教授 7 名、准教授 7 名、助教 4 名が在籍し、女性教員は 4 名、外国人教員は 3 名在籍しており、ダイバーシティも進みつつあります。さらに、専任教員として、生物工学国際交流センターの 5 名、情報科学研究科バイオ情報工学専攻の 6 名そして蛋白質研究所蛋白質結晶学研究室の 2 名が加わり、バイオ関連研究室グループ（以下、教室）として、学部、大学院での教育研究を行っています。当教室には、専任教員に加えて、令和 6 年度は特任教員 16 名、招へい教員 29 名、特任研究員 26 名、技術職員 1 名、さらに多くの技術補佐員ならびに事務補佐員の方々が在籍し、教育・研究に関与しています。産学連携では、3 つの協働研究所、6 つの共同研究講座、1 つの寄附講座も当教室と密接に活動いただいております。規模も大きくなりつつあります。

国際交流につきましては、生物工学国際交流センターの協力をあおぎつつ以前から継続している博士前期後期課程のバイオテクノロジー産学共創グローバル人材育成特別プログラム（通称：英語コース）で大学院教育を進めるとともに、博士前期課程のダブルディグリープログラム（DPP）、タイへの短期留学などの制度も充実してきています。SDGs が広く認知される中で、健康、環境、食糧といったグローバルな問題解決に、私たち教室員ならびに卒業生への期待がますます大きくなるとともに、責任も増していると感じます。

今後とも当教室に多大なご支援のほど何とぞお願い申し上げます。

各研究室近況報告

【生物資源工学領域】2024年度の福崎研は学部生6名、修士12名、博士17名とスタッフを合わせた合計50名のラボになりました。留学生は10名おり継続して国際的なラボになっています。また、福崎研の3本柱である、国際交流、産学連携、男女共同参画の一環として女性教授1名が本年度も引き続きクロスアポイントメント制度で在籍しています。2021年度に採択され現在も続けている工学研究科テクノアリーナ最先端研究拠点である「福崎フロンティア産業バイオ連携拠点」の活動も活発に行われており、定期的にシンポジウムを開催し、これまで以上に食品に関する研究を行っています。2023年5月にコロナ5類への引き下げがなされたため、face-to-faceとhybrid形式を併用して、学生が発表をする機会を積極的に設けています。お近くにお越しの際は、是非福崎研にお立ち寄りください。

【生命環境システム工学領域】渡邊研では一時期コロナ禍の影響で急激に留学生数が減少してしまいましたが、徐々に戻りつつあり現在は学部学生5名、修士学生14名、博士学生3名が在籍しています。また今年度は東南アジアを中心とする正規の大学院生に加えてドイツ、スペイン、イスラエルなどからも短期の研究者や大学院生を受け入れ研究を展開しており、国際的にも賑やかさが戻ってまいりました。私達の研究室のキーワードは生命と環境ですが、SDGsのこぼれを借りるまでもなく、地球環境問題や化学物質問題は喫緊の課題となっています。これから更に重要性を増していく領域だと考えており、今後も積極的に研究を広げてまいります。

【高分子バイオテクノロジー領域】2024年度の内山研は、鳥巢准教授、山口助教、特任教員、特任研究員、研究補佐、秘書、招へい研究員などのスタッフが全部で35名、学生は、留学生や社会人学生も含め、博士後期19名、博士前期16名、学部生6名、研究生4名、の合計80名の研究室でスタートしています。主な研究テーマは、バイオ医薬品や遺伝子治療用ウイルスベクターの分析と製剤、食品の物性と機能性の解析です。ウイルスベクター製造もプラットフォームが完成し、培養、精製、分析、製剤、と一貫した研究を行っています。成果は継続して得られており、学生も含め、国内外での研究成果発表を活発に行っています。バイオ医薬、遺伝子治療、いずれも、私たちの研究成果が高頻度で引用されており、より一層の科学技術基盤の充実に努めつつ、大学発の科学技術を社会に確実に還元できるように更に頑張りたいと思います。

【細胞工学領域】2024年度の村中研は、学生・教職員を合わせて総勢28名となります。

今年度も、植物の特化代謝に関わる研究プロジェクトが進められており、卒業生が関わった研究成果も続々と論文発表されています。発表された研究成果は研究室ホームページに掲載しますので、ぜひ確認してみてください。また、村中教授が今年度末(2025年3月)で定年退職される予定ですので、近くにお越しの際は、ぜひ顔を見せに研究室にお立ち寄り下さい。

村中教授の退職にあたって、2025年2月~3月頃に最終講義を、2025年5月頃に記念祝賀会を開催する予定です。こちらについても詳細が決まりましたら、順次ホームページに掲載しますので、卒業生の皆様、お誘い合わせのうえ、是非ご参加ください。

【生物プロセスシステム工学領域】本領域は、本年6月末現在、教員3名（紀ノ岡、金、山本）、特任教員・研究員などで62名、学生34名と、大所帯かつ国際的な研究室となっており、新たな学問体系「細胞製造性」を軸とし、社会実装に向けた産官学連携にて活動しております。細胞製造コトづくり拠点の活動としても、昨年10月から新たな2つの共同研究講座が加わり、6月末現在、6つの共同研究講座と連携して、細胞製造に関するコトづくりを邁進しております。

【生物化学工学領域】発足10年目は、大政教授、山野准教授、学部5、修士17、博士10、招へい・特任教員/研究員とスタッフで5か国53名です。HPも充実しています (<https://biochemicalengineering.jp/>)。大政先生は、工学研究科長・工学部長、大阪大学総長参与（経営協議会委員）、として全学/研究科の運営全般に携わり、Asian Federation of Biotechnology (AFOB) 会長、日本動物細胞工学会会長、JBA バイオエンジニアリング研究会会長・理事、MAB 組合 PL も務めています。AMED- 国産細胞 PJ（統括 PL 大政）、AMED- 革新的な次世代抗体医薬品製造技術の開発（PI 山野）、遺伝子治療製造 PJ（PL 大政）、NEDO、科研基盤 A（大政）と研究 PJ も充実しています。山野先生は 2024 年度日本生物工学会生物工学奨励賞（照井賞）を受賞されました。近くにお越しの際は是非お立ち寄り下さい。

【微生物機能工学領域】当領域は 2023 年 4 月に新たに設置されました。2024 年度は、初めての 4 回生を迎え、また、元根啓佑助教が着任しました。その結果、スタッフ 3 名、指導委託学生 2 名（博士前期 1 名・博士後期 1 名）、4 回生 5 名、研究員 4 名の総勢 14 名となりました。当研究室では、微生物学・合成生物学・オミックス科学の枠組みを拡張し、微生物が持つ極めて多様な機能を分析・再構成・応用することで、食を始めとしたさまざまな産業の課題を解決していきたいと考えています。次世代を担う人材の育成と、微生物を起点とした革新的バイオテクノロジーの創出に向けて努力して参りますので、今後とも皆様のご支援を賜れますようどうぞよろしくお願い申し上げます。

【バイオ情報計測学講座】バイオ情報計測学講座は 2018 年度から活動を開始し、2024 年の 3 月には 4 期生が無事に卒業するなど、設立 7 年目を迎えて活動を本格化させています。現在は、教授：松田史生、准教授：岡橋伸幸、助教：清家泰介の布陣で応生の学部教育を担当しております。2024 年度は学部生 5 名を迎え、修士 11 名、博士 4 名、スタッフ 9 名の計 29 名（6 月現在）の布陣でバイオテクノロジーを基盤に生物、計測、情報を融合した研究を活発に進めてまいります。2023 年 9 月の生物工学会大会には、学生、スタッフが現地参加し、久々の対面学会を満喫しつつ、研究成果を発表しました。また、2024 年 5 月には万博記念公園にピクニックに行き、結束を固めるなど、今年度も一層仲良く、日々の研究を続けてまいります。

【代謝情報工学研究室】令和 6 年度は、学部生 5 名、修士 9 名、博士 3 名、スタッフ 9 名の合計 26 名の体制となりました。戸谷准教授、二井手助教は革新的 GX 技術創出事業（GteX バイオものづくり）のプロジェクトを推進し、今田辰海特任助教と一色衣香特任研究員がスタッフとして加わりました。昨年度から今年度にかけて、JSPS の短期研究者招へいのプログラムで Rensselaer

Polytechnic Institute (米国) の Mattheos Koffas 博士を招聘教授としてお招きしました。また、昨年は、ドイツや台湾から大学院留学生の研究受け入れも行いました。新型コロナウイルス感染症が収まってきましたので講座旅行にも出かけました。本年度も、微生物によるものづくりを目指した代謝工学の研究と教育を行ってまいります。今後とも皆様からのご支援、ご鞭撻を賜ります様、何卒、よろしくお願い申し上げます。

【応用微生物学領域】本年度は学部4回生が5名、修士課程学生が15名、博士課程学生が12名、技術補佐員1名に、スタッフ3名の合計36名の体制で運営しています。相変わらずの国際色豊かな研究室で、日本人学生を含む6カ国に及ぶ学生が明るくアットホームな雰囲気のもと共同、協力して研究活動を行っています。昨年度に行われた修士1年生の中間発表では優秀発表賞（日本人1位）を受賞する結果となり、研究においても充実した成果を残しています。短期研究員、留学生の受入れ等に関しても精力的に実施しており、国際交流という本来のミッションを日々勤しんでいます。研究室活動の様子も「藤山研通信」にて頻繁にアップデートしていますので、是非ご覧ください。またお近くにお越しの際にはぜひラボにお立ち寄りください。

【分子微生物学領域】11月に発足5周年を迎える2024年度の本田研は、本田教授、富田准教授のほか、12名のスタッフと21名の大学院生、5名の学部生でスタートしました（2024年4月1日時点）。スタッフ・学生のうち11名が外国人（タイ、インドネシア、ベトナム、フィリピン、マレーシア、中国）で、これ以外にも短期留学生や外国人招へい教員が頻繁に出入りする国際色豊かな研究室となりました。2023年10月に本田教授が代表を務めるJST・GteXの研究プロジェクトが立ち上がったほか、ドイツ・ビーレフェルト大学との交換留学プログラムが始まるなど、研究・国際交流の両方でアクティブに活動しています。

【蛋白質結晶学研究室】研究室の准教授を務められた田中先生が任期満了で3月に民間企業へ異動されました。田中先生は大学院生として蛋白研（当時は月原研）にいられて以来、博士研究員、助教、准教授と長く研究室運営に貢献されました。4月になって3名の卒研究生が配属になり5名（内部進学3名、他大学2名）の院生が生物工学専攻の大学院に進学しました。応用自然科学科と生物工学専攻所属の学生が総勢15名となり、私が研究室を運営するようになって構成員は最大です。蛋白質構造解析の分野ではアルファフォールド3が発表され、構造予測と構造解析をどう折合わせていくかが喫緊の課題となっていますが、大阪大学からオリジナリティの高い研究を発信していきたいと考えております。引き続きご支援のほど宜しくお願い申し上げます。

【麹菌育種工学寄附講座】当寄附講座は公益財団法人発酵研究所からの寄附講座助成により、2021年10月に発足しました。今年は3年目の運営となり、麹菌の株によるゲノム情報の多様性と共通性について実験データを蓄積しています。寄附講座教授：楠本（憲）、寄附講座講師：酒井、寄附講座助教：田中、招へい教授：石田（月桂冠株式会社）、招へい准教授：眞岸（ヒガシマル醤油株式会社）、事務補佐員：楠本（由）の体制で研究を進めています。特任研究員の劉はこれまでに寄附講座の研究上重要な論文を2報執筆し、本年3月末で退職しました。5月には酒井が学部学生

実験を指導しました。また、企業や大学、国立・公設研究機関との共同研究を実施中です。お近くにお越しの際はぜひお立ち寄りください。

【Global Food and Agri-tech Laboratory】 In 2024, Sastia Putri Lab welcomes 2 new PhD students from Shimadzu Corporation supported under the REACH program and 1 new bachelor student. In October 2024, our laboratory will welcome 3 new international students including 2 new PhD students supported by LPDP scholarship and 1 master student supported by MEXT scholarship. We also welcome several exchange students and staff from Vietnam, Thailand and Indonesia. This June, Sastia Putri co-chairs the largest international conference in metabolomics field organized by the Metabolomics Society. There were 822 participants from 49 countries attending the conference held at the ATC Hall Osaka. Students of our laboratory participated in the conference as volunteers and had an opportunity to interact with global researchers in the conference. Recently, Sastia Putri was awarded the Momofuku Ando Prize as the first non-Japanese recipient of this award for breakthrough research in food metabolomics. She also published her first collaborative paper with Harvard Medical School and was published in a prestigious journal Food Chemistry. Please check out our latest publication Multidisciplinary approach combining food metabolomics and epidemiology identifies meglutol as an important bioactive metabolite in tempe, an Indonesian fermented food–ScienceDirect

工学研究科長・工学部長に就任して

大政 健史（昭和61年卒）

2024年（令和6年）4月1日から、2年間の任期にて大阪大学大学院工学研究科長・工学部長に就任致しました。今から130年近く前の1896年の官立大阪工業学校の創設時から数えて42人目、尚醸会会員としては初めての工学研究科長・工学部長になります。また、大阪大学全体では総長参与、理工情報系戦略会議議長、大阪大学経営協議会委員、総長選考・監察会議委員にも就任しております。皆様、宜しくお願い致します。

さて、工学部・工学研究科には、約6,000人の学生、そして150名の教授を始めとする約500名のAcademic Staff、そしてそれとほぼ同数の事務職員が在籍しております。この人数は、大阪大学全体の約1/4を占め、阪大で最大の学部・研究科となっております。約6,000人の学生数となりますと、地方国立大学（例えば、私の在籍していた徳島大学）とほぼ同じサイズ感です。また、協力講座・領域を含めると約170余りの研究室があり、「工学」の分野における様々な学び（全てと言っても過言ではありません）を実現できます。

現在の研究科の専攻は9つ（生物工学、応用化学、物理学系、機械工学、マテリアル生産科学、電気電子情報通信工学、環境エネルギー工学、地球総合工学、ビジネスエンジニアリング）、学部は5学科（応用自然科学、応用理工学、電子情報工学、環境・エネルギー工学、地球総合工学）となっています。ビジネスエンジニアリング専攻を除く全ての専攻に英語コースが設置され、海外との様々なダブルディグリープログラム（DDP）やトリプルディグリープログラムの設置もあり、56ヶ国から約500名の留学生も受け入れています。約30件の協働研究所・共同研究講座も設置されています。これだけの規模の運営は大変で、研究科長が学内外において、役指定でこなす役割は50以上になっています。工学研究科の活動は、ホームページやSNS、さらには定例記者会見も用いて発信しており、実際の活動を展示するギャラリーもU1W棟、1,2階に設置しています。是非ご覧頂ければ幸いです。

最後にお願いで恐縮ですが、研究科全体では、予算規模は118億円（教職員の人件費は含まない）なのですが、このうち、校費と呼ばれている運営交付金は19.7億円に過ぎず、その8割は受託研究や補助金といった使途が決められているものになります。この8割の研究資金は年々拡大を続け、国際卓越研究大学を目指す大阪大学が活発に世界最先端レベルの研究活動を続けていることがわかります。一方、基盤的なインフラ整備を担うべき国立大学への運営交付金は年々減少しており、6月に国立大学協会会長が「もう限界です」と発言したように、トイレやエアコンを含む学生や研究室の環境インフラ整備費用が危機的な状況です。卒業生の皆様は、是非、来学されて現状をご覧になって頂き、ふるさと納税ではなく、ぜひ、大阪大学に、ご寄付をお願い致します。近年、退職やご遺贈における寄付も増えており、また在校生の父母や、卒業生の皆様からの寄付も増えています。ホームページの大阪大学未来基金、にて「工学部・工学研究科教育研究事業」をお選び頂いてご寄付いただくか、ご要望も添えたい場合には、私宛に直接ご連絡頂ければ幸いです。もちろん、税法上の優遇措置も受けられます。どうか宜しくお願い致します。

（写真は工学研究科ギャラリー生物工学専攻の案内前にて）



教員紹介：着任のご挨拶と研究の紹介

大阪大学 大学院工学研究科 生物工学専攻 細胞工学研究室

助教 安本周平（平成 24 年卒）

2019年5月付で生物工学専攻の助教として着任いたしました。村中俊哉教授、關光准教授とともに、細胞工学研究室における日々の教育・研究に従事しております。伝統ある生物工学専攻の一員として、微力ながら精一杯尽力していく所存です。尚醸会の皆様におかれましてはご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

私は新居浜工業高等専門学校を卒業後、2010年に大阪大学へ3年次編入学し、2011年に村中研究室へ配属され、当時助教としてご在籍であった岡澤敦司先生（現 大阪公立大学教授）に根寄生雑草ヤセウツボの発芽に関する研究をご指導いただきました。岡澤先生の移動に伴い、大学院への進学後は村中先生、關先生のご指導のもと、植物のゲノム編集技術の確立と特化代謝産物・トリテルペノイドの生合成酵素の機能解析に関する研究を行い、2017年に博士（工学）を取得しました。その後、村中研究室で特任研究員として植物のゲノム編集研究に従事し、助教として採用され、引き続き日々の研究と教育に従事しています。

私はこれまでに植物が生産する多様な代謝物に興味を持ち研究を行ってきました。現在は、主にジャガイモを対象に研究を行っています。ジャガイモは世界的に重要な作物ですが、有毒な特化代謝産物であるソラニンやチャコニンといったステロイドグリコアルカロイド（SGA）を合成することが知られています。これらのSGAは通常問題になることはありませんが、不適切な栽培・保管によって合成量が増加することで、度々食中毒事件が発生しています。そのため、ジャガイモの育種家は長年SGAを含まない系統の作出を目指していましたが、ジャガイモ栽培品種の多くが四倍体のヘテロなゲノムをもつことから、SGAが大きく低減した有望な系統を作出することができていませんでした。私は共同研究者らとSGAの生合成経路に着目し、ゲノム編集技術を使用して生合成酵素遺伝子を破壊することで、SGAを大きく低減したジャガイモ系統を作出しました。まだまだ多くのハードルがありますが、これからも必要な技術開発を行い、このSGA低減ジャガイモの実用化を進めていきたいと考えています。

今回紹介させていただいた研究は、ゲノム編集によって人間に不要な植物代謝物を低減させるものでしたが、逆に、ゲノム編集によって有用な化合物を代謝工学的に増強させることも可能です。今後も植物ゲノム編集/バイオテクノロジーを新しい産業に結びつけられるように、研究と情報発信に努めていく所存です。今後ともどうぞよろしくお願い致します。



阪急千里線「北千里」発、大阪メトロ御堂筋線「なかもず」着

大阪公立大学大学院農学研究科 岡澤敦司（旧教員）

早いもので、千里線最北に位置する大阪大学工学研究科から、御堂筋線最南の終着駅を最寄りとする大阪公立大学農学研究科（当時は大阪府立大学生命環境科学研究科）に移ってから干支が一周してしまいました。ちょうどこのタイミングで教授に昇任し、現役として残りのもう一周も堺を過ごすことになりそうです。吹田で1998年から2012年まで勤務しましたので、私のアカデミアの第一周は阪大、第二、三周は大阪公立大でということになり、大阪の北から南に移っただけのローカルなキャリアがほぼ確定となりました。

とはいえ、阪大勤務の初日（？）に、当時1階にあった日本生物工学会の事務室に福崎先生に連れて行かれ、何はともあれ入会しなさいとのことで、以来、日本全国、世界各国の研究者の皆さんと知り合う機会に恵まれました。まずは、阪大の周りの研究室の先生方やポスドクの皆さんに随分と良くしていただき、今日はどこそこのラボで飲んでいるようだという情報を仕入れてはお邪魔しに行っていました。次に、生物工学若手研究者の集い（若手会）にデビューを果たし、日本各地から参加した同年代、先輩の皆さんとの朝までの交流を数年行っているうちに顔見知りが増え、本大会への参加も楽しみになりました。しばらくして、日本生物工学会の和文誌編集委員にと声をかけていただき、これまでのキャリアの相当な時間を和文誌編集委員として過ごしています。この委員会でも多くの先生方、原稿を通じてであれば、生物工学に関わる国内研究者をほぼカバーできていると思われる方々と知り合うことができました。私にとってかけがえのない場所ですが、長く居過ぎていることも自覚しており、そろそろ退くべき時期が来たと思っています。そうこうするうちに、当時の助教、准教授層の先生方が次々と全国に栄転され、私も縁あって大阪府大に職を得ることができました。その間、尚醸会にも関わることができ、会議の前後などに同僚の先生方と今後のキャリアや教育、研究について語り合ったことを思い出します。

また、植物を対象として研究を進め、特に寄生植物と出会ったことで研究の場が一気に世界に広がりました。というのも、一部の寄生植物はアフリカやヨーロッパで農業に多大な被害を及ぼしているからで、SATREPSにも参画する機会を得て、スーダンへの年数回の渡航を5年以上行いました。日本での寄生植物研究も盛り上がりを見せており、国内の研究者がオーガナイザーとなり本年度の6月に奈良の春日野国際フォーラムで第17回国際寄生植物学会（17th World Congress on Parasitic Plants）を開催しました。手前味噌ですが、自作のロゴが能舞台の横に掲げられていてテンションが上がりました（写真）。私が作ったのは文字の部分ですが数字の1は寄生植物のコシオガマをデザインしています。

字数が尽きましたが、結局、阪大に端を発して大変お世話になった皆様には感謝しかありません。



近況報告：2つの研究室を主宰して

理化学研究所 / 東京大学 古澤力 (旧教員)

私は2003年10月から2012年3月までの8年間、清水浩先生が主宰されているバイオ情報工学専攻・代謝情報工学講座の助教授/准教授として、この生物工学専攻に関わらせて頂きました。私はこの生物工学専攻の卒業生ではなく、物理学を背景とする理論生物学という大きく異なる分野からの参加でした。生物工学や代謝工学の研究を全く行ったことがないポスドクを、新しい講座の助教授として採用するという大胆な人事だったと思いますが、受け入れて頂いた清水先生には大変に感謝しております。今にして思うと、阪大時代は研究室や学科・専攻の運営などについては清水先生に大いに頼り、またそうした運営について学ばせて頂きました。さらに、好き勝手に研究をさせて頂くことにより、その後の研究活動の基盤を構築していった非常に有意義な8年間であったと思います。清水先生をはじめ、専攻の先生方には大変に感謝しております。

私は現在、2つの研究室を主宰しています。一つは本務としている理化学研究所・生命機能科学研究センターの多階層生命動態研究チームです。現在は阪大吹田キャンパス近くの、かつて大阪大学バイオ関連多目的研究施設 (OLABB) と呼ばれた建物で研究をしていますが、2025年初頭に神戸ポートアイランドに移転する予定です。チームには5人の研究員と4人のテクニカルスタッフが在籍しており、主に微生物の進化ダイナミクスが持つ性質を理論と実験の両面から解析をしています。理研は研究センターの統廃合や、共同研究をしていた他のチームが突然取り潰しになるなどダイナミックな組織改編があり、スリリングな研究室運営を楽しんでいます。

もう一つの研究室は、クロスアポイントメントによる兼務先である東京大学理学系研究科の生物普遍性研究機構にあります。生物普遍性研究機構は全学の各部局に所属をしている30程度の研究室からなる組織で、私の研究室は理学系研究科の物理学専攻に所属しています。また、私は理学系研究科の生物科学専攻も兼担しており、私の研究室は物理学専攻と生物科学専攻の両方から大学院生が入学してきます。研究内容は多岐にわたりますが、進化や代謝システムについての理論研究に加え、微生物や生態系の進化実験による解析を進めています。京都大学や千葉大学からの指導委託の学生を含めると、博士課程学生が11名、修士課程学生が7名といった理学系には大所帯の研究室となっていますが、物理学出身と生物科学出身の学生が同じ研究室で密に交流をすることにより、分野融合型の研究を活発に進める環境が作れないかと模索をしています。

2つの研究室が関西と関東にあり、毎週どちらの研究室にも顔を出すようにしているので、年間で100回近く飛行機に乗るといった慌ただしい日々を送っています。どちらの研究室でも、今は基礎科学に軸足を置く研究活動ですが、企業との共同研究も続けるなど、生物工学分野との繋がりも維持したいと考えています。代謝の理論解析や微生物進化実験などにご興味がある方は、ご一緒できることがあるかもしれないのでご一報を頂けると幸いです。

令和5年度尚醸賞の授与

工学部応用生物工学コースの成績優秀者の努力を讃え、2024年3月25日にサントリーメモリアルホールにて、尚醸会を代表して会長の関先生より尚醸賞が授与されました。受賞者の皆様の今後の益々のご活躍を期待しています。

尚醸賞受賞者のコメント

鳥井 奈津実さん

この度は尚醸賞を頂きましたことを誠に光栄に思います。大学4年間、先生方や先輩方、家族に支えられながら日々友人と切磋琢磨し勉学に励んでまいりました。その結果、同じ研究室の仲間とともに尚醸賞を受賞でき、大変嬉しく思います。このような名誉に恥じないよう、これからより一層精進してまいります。

酒井 翔平さん

この度は尚醸賞をいただき、誠に光栄に存じます。共に議論して切磋琢磨した学友や、先生方、家族の支えのおかげで学びをここまで深めることができました。皆様に心より感謝いたします。今回の受賞で自分の努力へ自信を持つことが出来ました。この名誉に恥じぬよう、大学で得た学びを社会貢献に活かせる人材を目指してこれからも精進してまいります。

小西 萌絵さん

この度は尚醸賞を受賞させていただき、誠にありがとうございます。大学4年間、先生方や先輩方、友人、家族など、たくさんの方々を支えていただきながら努力を重ねてきた結果を、このような形で評価していただき、大変光栄に思います。今後も周囲の方々への感謝の気持ちを忘れることなく、日々精進してまいります。



令和5年度工学賞を受賞して

大阪大学大学院工学研究科生物工学専攻 内山研究室
博士前期課程1年 鳥井奈津実（令和6年卒）

この度、令和5年度大阪大学工学賞を頂きましたことを誠に嬉しく思います。このような大変名誉ある賞を頂いたのは、講義において様々な分野をご指導して下さった大阪大学の先生方、研究室において実験方針や考察方法について熱心にご指導して下さった内山教授をはじめとする先生方や先輩方、ともに勉学に励んだ同期、精神的・経済的に支えてくれた家族のおかげでございます。この場をお借りして心より感謝申し上げます。このような名誉に恥じないように、これからより一層研究および勉学に励む所存でございます。

先ほど触れましたとおり私は現在、内山教授のご指導の下、アデノ随伴ウイルス（AAV）ベクターのスケールアップ可能な製造プロセスの開発のため、ろ過膜を用いた清澄化プロセスに着目して研究を進めております。研究室に配属されてから一年が経ちましたが、答えのない問題に自分なりの解決策を考えて取り組むという研究の難しさを日々感じております。問題解決のために、膨大な数の論文から自身の研究に関連する論文を探して読み、それらの情報をもとに仮説を立てて実験を行い、得られた結果から論理的な考察し、再び仮説を立てるというサイクルは、研究に慣れない私にとって非常に困難なものでした。しかし、先生方や先輩方が実験計画や考察方法に関して多くの助言をして下さったおかげで、少しずつではありますがそのサイクルを自分で回すことができるようになってきていると実感しております。実験では自分の仮説と真逆のことが起きることもしばしばあり苦労を重ねることも多いですが、日々新しい発見があることが自身の研究のモチベーションにも繋がっております。まだまだ、思考力や発想力、プレゼンテーション能力や語学力といった研究者として必要な能力が足りておらず、自分の未熟さを日々痛感しております。これからの大学院生活の中で、自分自身に足りていない能力を認識し成長できるように努力し続ける所存でございます。

以上のように、未熟ではありますが研究室では周囲の皆様の支えのおかげで大変有意義な時間を過ごすことができしております。私は将来、生物工学専攻の卒業生として生物を使ったモノづくりを通して社会に貢献したいと考えております。そのために精進してまいります。周囲の皆様におかれましてはこれからもご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いたします。

令和5年度 尚醸会バイオテクノロジーセミナー 報告

庶務幹事 安本周平（平成24年卒）

令和5年度の尚醸会総会およびバイオテクノロジーセミナーは、11月11日（土）に開催されました。昨年度に引き続き、今年度も大阪大学吹田キャンパス・サントリーメモリアルホールでの対面開催と、Web配信を併用したハイブリッド形式での開催となり、対面60名、オンライン10名の同窓生・在校生が集いました。

総会では、関達治（昭和42年卒）会長の挨拶から始まり、福崎英一郎（昭和58年卒）幹事長から事業報告、村中俊哉 生物工学専攻長から教室の現状報告、鳥巢哲生（現教員）財務担当幹事から令和4年度の会計報告、高松智（昭和44年卒）会計監査からの会計監査報告が行われました。

バイオテクノロジーセミナーでは、日本テトラパック株式会社の新家康弘（平成15年卒）様から「卒業20年かけて辿り着いた紙容器の世界」、弘前大学の柏木明子（平成6年卒）様から「北東北での大学教員生活」という演題でご講演いただきました。どちらの演題も非常に興味深く、参加者からの活発な議論が行われました。



新家康弘（平成15年卒）様



柏木明子（平成6年卒）様



集合写真



交流会

セミナー後、大学構内の Kitchen BISHYOKU へと場所を移し、4年ぶりの交流会が開催され、歓談のひと時を過ごしました。

同窓生の皆様、次回の尚醸会バイオテクノロジーセミナーにもお誘い合わせのうえ是非ご参加ください。

令和5年度尚醸会企画OB・OG懇談会開催報告

生物工学 新聞秀一（現教員）

【イベント名】

2023年度尚醸会OB・OG交流会

【開催日時】

2023年9月22日（金）17:00~20:30

【会場】

大阪大学吹田キャンパス生物工学国際交流センターβ棟3Fセミナー室

【参加者内訳】

OB・OG参加者：企業幹事3名を含むドクター～B3まで34名とOB・OG4名および教員3名（合計41名）

【懇親会会費】

3000円とし、OB・OGは招待としました（教員3名からは5000円）。

【次第】

開会の挨拶（企画幹事：新聞秀一）

OB・OG講演

1. 山口祐希（工学研究科内山研 助教、平成30年卒）
2. 生田宗一郎（関西学院大学 助教、令和5年博士修了）
3. 谷口百優（島津製作所、平成28年卒）

アカデミア2名と企業勤務者による学生時代の研究生活と現在のキャリア（仕事内容）の紹介
質疑応答

懇親会（18:30~20:30）

【講演内容概要】

本年度のOB・OG懇談会は、コロナ感染症が5類に移行したことから、ハイブリッド形式の講演会と対面での懇親会を開催しました。

アカデミア出身のOB・OGからは、研究分野の魅力や大学院生活の過ごし方、研究者を志すきっかけなどが紹介されました。企業勤務のOGからは、仕事内容などの体験談が語られました。また、数多くの学生が参加したことから、話題の中に「ワークライフバランス」に関する内容を盛り込んでもらいました。

質疑応答では、「研究者を目指す上でのアドバイス」「企業と研究機関での違い」「プライベートと仕事の両立」など、進路選択に関する質問が想定以上に数多く寄せられ、熱心な議論となりました。

【懇親会の様子】

休憩を挟んで行われた懇親会では、OB・OG・学生現役の垣根を越えて、和やかな雰囲気の中で懇談が行われました。食事を交えながら、進路選択に関する相談や先輩方からの生き生きとした体験談など、非常に有意義な交流が行われました。

【総評】

当初の目的通り、OB・OGと現役学生の相互理解を深め、進路選択の一助とすることができました。終始活発な意見交換が行われ、大変有意義なイベントになりました。参加者一同、実り多い一日となりました。2023年度は、参加者アンケートをとることを失念していたため、参加者からの具体的な感想を聞くことができず申し訳ありません。2024年度開催分に関しては、アンケートに回答してもらうことで、OB・OG交流会の感想を取得しようと考えております。ご多用中にもかかわらず、ご参加くださった教員、学生、OB・OGの皆様へ深く感謝申し上げます。今後も定期的に交流の場を設けてまいりたいと考えておりますので、引き続きご支援のほどよろしくお願いいたします。



尚醸会 OB・OG 交流会参加者のスナップショット

卒業後 41 年、コロナ禍を超えて 7 年ぶりの同窓会は母校訪問

同窓会幹事 上田太郎、谷口貴之、宮階定憲（昭和 57 年卒）

1982 年（昭和 57 年）学部卒業の同級生で、2023 年 11 月 11 日～12 日に、同窓会を開催いたしました。前回開催（2016 年、岩手・宮城にて）時に、「歳もとったので、忘れ難いように、次回からオリンピックイヤーに開催しよう」と決定し、2020 年大阪開催で準備を進めていたのですが、まさかのコロナ禍により延期を余儀なくされました。コロナも落ち着いた昨年、漸く 7 年振りに同窓会を開催することができました。幹事は、2020 年の担当であった上田さん、谷口さん、宮階さんの 3 名が担当し、母校訪問とサントリー工場見学を組み合わせたプランを決め、役割分担して進めましたが、ギリギリまで準備に苦戦したものの何とか開催にこぎ着けることができました。

初日は、まず大学の訪問からスタート。阪急北千里駅に 22 名の参加者が集合し、「久しぶり！元気だったか？」と夫々再会を喜びつつ、手配のマイクロバスで吹田キャンパスに向かいました。校舎の見学については、事前に大政先生と相談させて頂いたのですが、御快諾頂いた上に、当日の案内役まで引き受けて頂き、大変有り難かったです。大政先生、本当に有り難うございました。大政先生のご案内で校舎見学し、サントリー記念館メモリアルホールでは集合写真撮影も出来、良い記念となりました。卒業以来、41 年ぶりの方も居られ、参加者の皆さんには、大変喜んでいただきました。実は、この日は、尚釀会バイオテクノロジーセミナー（同窓会）の開催日でもあったので、参加も検討したのですが、以後の予定の関係もあって、参加は見送らせていただきました（尚釀会の皆様、本当にすみません）。その後、高槻市の山水館で懇親会を行い、近況報告、歓談となり、夜遅くまで酒を酌み交わしました。60 歳を超えて酒量は落ちたかもしれませんが、延々と飲み続けるパワーは、落ちていませんでした。翌 12 日には、サントリー京都ビール工場見学と試飲会もしっかりこなしました。4 年も空けると、次に健康で集まれるかどうか分からないということで、次回開催は 2 年後（つまり来年）とすることを決めて、解散となりました。皆様、また元気に集いましょう。



近藤 光、多田宏子、辰巳宏樹

高木昌宏、村上弘次、村井正俊、上田太郎、岡本春実
片倉啓雄、曾我 浩、宮階定憲、田賀辰也、山本和樹
島康文、岸本健利、小川行平、金子正行、徳井三千夫

上松仁、武内 章、小谷卓也、姫野 毅

旧制大阪大学工学部醸酵工学科昭和 28 年卒業生同窓会（二八会）の松田祥吾様より、世界最古の木造建築である法隆寺をテーマとしたエッセイをご寄稿いただきました。

法 隆 寺 —木のいのち—

松田祥吾（旧制昭和 28 年卒）

大和は国のまほろば、おだやかな山々に囲まれたこの盆地には幾つもの寺院や仏塔が風景に溶けこみ、かつ、凜として立ち続ける。誰がどのような想いを込めて建てたのであろうか。バベルの塔のように天にとどく塔を建て、神の座に近づこうとする挑戦的な雰囲気は微塵もない。王位や権勢を誇示し高みから人を見下して威圧するような意図も感じられない。この神聖とも言うべき清らかさと控え目な大きさ・高さが示すものは何か。天から下り給う聖なるお方をお迎えする敬虔な気持ちの現れではなからうか。

法隆寺は現存する世界最古の木造建築として知られている。長い年月の間に数え切れないくらい繰り返された温度や湿度の大きい変化に耐え、数多くの台風の強い風雨に耐え、何回かあった阪神淡路大震災クラスの大地震にも耐えた。さらに戦乱や政変もくぐり抜け、千三百数十年の風雪に耐えて傾きや変形もなく、損傷もなく静かに立っている。この木造建築を造り上げた飛鳥時代の工人たちはどのような知恵を持っていたのだろうか。解体修理を担当した宮大工の棟梁・西岡常一氏⁽¹⁾と岡田善雄氏⁽²⁾の対談⁽³⁾から、特に印象に残ったことを以下に要約する。

屋根は二百年くらいごとに修理してきたが、骨格と言うべき軸部・柱・桁などはすべて創建当時のものがそのまま継続使用されている。長持ちしているのは檜ひのきを使ったからである。神代の頃からの伝承と言われている日本書紀によると「瑞宮みづのみや（宮殿）には檜ひのきを使え」とある。王君の長寿と王位の永続を願って宮殿は長持ちするもので建てなければならず、それが檜ひのきであった。「杉くすのきと楠うきたからは浮宝（船）に使え」という伝承もあり、海水に長期間濡れっぱなし、強い紫外線にさらされ、濡れたり乾いたりをくり返しても持つからである。「榎まきは棺たまきに使え」と伝えられているのは、榎は土中でも腐食に強いからである。このように適材適所がわかっていたのは、あの遠い昔に既に長い年月をかけた実用経験がくり返され立証済みであったからである。

檜は伐採して百年、二百年は強度が強くなり、その後、極めて徐々に低下する。だから伐採したばかりの木と、今、法隆寺で使われている木は強度が同じかも知れない。そのような特別な挙動を知っていて檜を使ったという知恵がすごい。使い方にも念を入れた。法隆寺の大工は「木は生育の方位のままに使え」と言い伝え忠実にそのことを守った。一本の原木から柱を大体四本とって、自然に生えていた東西南北の方位のまま使う。生えていたとき南だった部分は南の柱に、北だった部分は北の柱に使う。強く長持ちするのはこのような使い方をするからでもあって、これはもう一つの適材適所である。ところが南はどうしても枝が多く節が多いから、見た目は良くない。室町時代以後の建物は見栄えの良さが重視されたので造形に力点が移行し、生育方位のまま使うことをしなくなった結果、建物の寿命が短くなり、六百年くらいしか持たなくなった。

樹齢五百年は五百年、千年のものは千年持つと言い伝えられ、西岡棟梁は良い檜を求めて探しまわった。近年では木曾の山でもせいぜい五百年くらいの樹齢のものしかなく、台湾の深い山奥でようやく樹齢千年くらいを見つかることが出来た。このような木は滅多にあるものではなく、広大な天然林の中に、あちらにポツン、こちらにポツンと立っている程度である。西岡棟梁は訥々と語る。

- 二千年立ってる木は二千年の風格がありますな。やっぱりそりゃ神様やな。材木という感じがしません。誰もいない深い森の中、一人で向き合っていると、ジーンと体の力が変わってきましたな…。
- 植林したものは五百年くらいしか持たない。千年、二千年持たそうとすると天然林の檜でない…。大きな良い木が育つのは栄養分の殆どない岩場みたいな所なんです。腐葉土のたっぷりある所で育った木は駄目です。

岡田氏は「宮大工の方はいろいろの知恵を持っておられますがいちばん大切なことは何でしょうか」と質問し、棟梁は答えた。「神仏をあがめずして社頭伽藍を口にすべからず、という口伝があります。神様・仏様の宮殿を造らせて頂いておりますので、一切の俗慾・雑念を去って仕事に没頭することです」岡田氏が更に「法隆寺は建立されて千三百数十年持っています。今回の解体修理でまたどれくらい持つでしょうか」と尋ねると、「そうですね。千年は大丈夫持ちますな」棟梁は淡々と答えた。長い年月をかけ体で感じとった知識と敬虔な気持ちから自ら出てくる信念を感じた岡田氏は感歎して深く頷き対談を終えた。

法隆寺は仏法の興隆を目指す聖徳太子の願いにより建立された。深い山奥の岩場で二千年の風雪に耐えた老木を用い、飛鳥の工人の清らかな心と知恵をこめて造り上げられ千三百余年が過ぎ、次の千年に入った。神秘的とも言うべき悠久の木のいのちである。

(追記)

この対談に関連して筆者がかねてから知りたかったことは法隆寺五重の塔の基礎である。千三百余年の年月、不等沈下を起こすことなくあの塔を支え続けてきたのはどのような基礎であろうか。あの遠い昔、どのような測定器や工具があったのか知る由もないが、万全の配慮がなされた筈である。もしもあの五重の塔がピサの斜塔のようになったら、あの一帯の神聖とも言うべき清らかな眺めは台無しになった筈である。関連事項をご存知の方はご教示下さい。最も大切なことは、見えない所にもなすべきことを誠実に実行する心の姿勢である。

(参考)

1. 西岡常一：1908年 奈良県生まれ。宮大工の棟梁として法隆寺金堂、法輪寺三重塔、薬師寺金堂、同西塔などの復興や再建を果たした。文化財保存技術保持者。文化功労者。1995年没。
2. 岡田善雄：1928年 広島県生まれ。海兵75期、旧制高知高校・阪大(医)卒。阪大微生物病研究所助手～助教授～教授。細胞融合の発見者として世界的に有名。阪大細胞工学センター長。勲一等瑞宝章受賞。2008年没
3. 関連図書：「いのちの科学を語る」岡田善雄著。2007年1月31日、発行者・財団法人千里ライフサイエンス振興財団。

寺院別比較

名称	法隆寺	ウエスト・ ミンスター寺院 Westminster Abbey	ケルン大聖堂 Köln Münster	ウルム大聖堂 Ulm Münster	ノートルダム 大寺院 Cathédrale Notre-Dame
所在地	日本 奈良	イギリス ロンドン (テムズ川畔)	ドイツ ケルン (ライン河畔)	ドイツ ウルム (ドナウ川畔)	フランス パリ (セーヌ川畔)
創建 (西暦)	693 年	1042 年	1880 年	1890 年	1163 年
完成後 経過年数 (2024 年現在)	1331 年	982 年	144 年	134 年	861 年
備考	<u>木造</u> 最初、607 年 に建立された が、火災で焼 失。693 年に 再建された。	<u>石造</u> 7 世紀頃の古 い教会の跡に 建立。以後少 しずつ増築さ れた。	<u>石造</u> 着工は 1248 年。途中数百 年間、工事が 中断されてい た。	<u>石造</u> 1377 年に着 工。途中、工 事が何百年か 中断。	<u>石造</u>

以上

令和5年度タイ派遣プログラム・SSSV 学生へのご支援に対する御礼と報告書

生物工学国際交流センター
藤山和仁（昭和59年卒）

生物工学専攻の協力部局である生物工学国際交流センターは2011年度より、日本学生支援機構(JASSO)海外留学プログラムを利用し、タイ最上位4大学での在外研究と、そのカウンタープログラムとしてASEAN諸国からの留学生の受け入れ機会を提供するSSSV(Short Stay, Short Visit)プログラム・海外フィールドスタディS「生物資源と環境」を実施してきました。2020、2021年度のコロナ禍による中断を経て、2022年度に再開し、2023年度は工学研究科生物工学専攻の21名が参加しました。

内訳 藤山研 6名 本田研 3名 福崎研 3名 内山研 3名
大政研 3名 渡邊研 2名 栗栖研 1名

8月8日と9日は、モンクリット王工科大学トンブリ校(KMUTT)で同大学主催のオリエンテーションに参加しました。8月10日は味の素株式会社バーディ工場見学とアユタヤ遺跡に出かけました。8月11日からは、チュラロンコン大学(7名)、カセサート大学(7名)、マヒドン大学(7名)に配属され、「生物資源と環境」に関する研究・実習をしました。プログラム後半では、在バンコク日本大使館を訪問し、マヒドン大学理学部にある生物工学国際交流センターの東南アジア共同研究拠点で最終報告会(英語)を実施しました。

プログラム最初のKMUTTでのオリエンテーションでコロナとインフルエンザが拡散し、参加者の80%が感染する状態になりましたが、現地に長期滞在されていた本学教員や、タイ4大学の教員などのご協力で医療施設で治療を受け、感染した学生も回復し、以降のプログラムを継続できました。昨今の世界情勢と円安の影響により、コロナ禍以前に比べ渡航費用が高騰していました。さらに、保険にかかる費用、感染抑止のための宿泊施設の確保などの負担が増えていました。今回の尚醸会からの総額360,000円のご支援で、学生の負担が軽減できました。今回ほど、保険を掛けていたことが、医療施設での治療に有効だったことを感じたことはありません。タイへの渡航前のオリエンテーション授業の中で、福崎幹事長(昭和58年卒)から尚醸会の説明と援助についての説明がありました。

当該プログラム・海外フィールドスタディS「生物資源と環境」は、醗酵・応用生物工学科ならびに相当する大学院を卒業・修了した、あるいは、ユネスコ微生物学国際大学院研修講座を修了した上記タイ4大学で教鞭をとるタイの先生方(同窓生)のご協力を得て実施していることを申し添えます。

最後になりましたが、令和5年度タイ派遣プログラム・SSSVに参加した学生にご支援いただきましたことを厚く御礼申し上げます。

以下に、令和5年度SSSVプログラムに参加した学生の手記を掲載します。

①藤山研 藤田悠理奈 派遣先(チュラロンコン大学)

留学を通して、研究技術を深めるだけでなく英語でのコミュニケーションに対する姿勢についても見直す機会になりました。研究活動を始め、タイの人々との交流の中で積極的に自ら行動していくことが自身の成長につながりました。

②内山研 古田勇馬 派遣先(チュラロンコン大学)

海外フィールドスタディでは、タイ現地の学生との交流や専門分野の異なる学生や先生との議論を通して多角的な視点を身に付けることができました。海外フィールドスタディで得られた学びを今後の研究活動の基礎としていきたい。

③福崎研 林優希 派遣先(チュラロンコン大学)

一ヶ月のタイ留学では、日本とは異なる研究の他、食体験、文化に触れることが出来、貴重で有益な時間だったと感じています。多様な価値観に溢れる世の中であることを再認識した今、自分にとっての「良い選択」を改めて考えるようになりました。

④福崎研 石本梓穂 派遣先(チュラロンコン大学)

まずは、ご支援いただきありがとうございます。本研修において、異分野の研究や異文化に触れることで、自身との違いを学び、新たな考え方を得ることができました。また、私自身が留学生の立場になることで、考えさせられる部分が多くありました。

⑤内山研 木野慎一郎 派遣先(チュラロンコン大学)

今回のSSSVプログラムで私は初めて海外を訪問しましたが、大変刺激的で有意義な時間でした。異なる言語、文化、価値観に実際に触れることで世界の広さを実感しました。この経験で得たものを生かし、将来は世界を相手にした仕事をしていきたいと思います。

⑥福崎研 水谷窓 派遣先(チュラロンコン大学)

タイの研究室では日本ではほとんど行ったことのないゲノム解析や電気泳動について学び、知識の幅を広げることができました。また、現地学生との交流を通してタイ文化を楽しみました。

⑦本田研 森兼志歩 派遣先(チュラロンコン大学)

研究活動や文化体験、食事など、1日1日が充実していました。タイの人々は明るく、海外生活で不安な中、元気を貰える存在でした。勇気を出して新しい環境にチャレンジしたことで、思い出だけでなく生涯にわたって自分の自信となる経験が得られました。

⑧大政研 林晴太 派遣先(カセサート大学)

SSSVにあたり多大なるご支援、本当にありがとうございました。タイの留学を通して「多様な価値観を尊重する重要性」と「コロナという困難な環境の中でも粘り強く生き抜く力」を学ぶ事が出来ました。この経験を糧に、今後の研究活動並びに将来の仕事も頑張っていきたいと思います。

⑨渡邊研 稲垣晋輔 派遣先（カセサート大学）

OB・OGの皆様、この度は海外フィールドスタディへの多大なるご支援、まことにありがとうございました。皆様からのご高配にて、タイにおける1ヶ月の研修を有意義なものとすることができました。この場をお借りし、重ねて心よりお礼申し上げます。今回の研修を通じ、日本国内では決して経験することのできない貴重な体験をすることができました。特に、現地の学生との交流や共同研究により、人間的にも大きな成長を遂げることができ、これはかけがえのない財産となっております。来年度以降もこの研修プログラムが継続されることと存じますので、後輩学生へのご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

⑩藤山研 中岡莉菜 派遣先（カセサート大学）

この度はバンコク留学にご支援いただき誠にありがとうございました。1ヶ月間のタイの大学での研究は、私にとって非常に貴重な経験となりました。この経験を人生の糧として、今後も研究、勉学により一層励んでまいります。

⑪藤山研 大窪華和 派遣先（カセサート大学）

同年代のタイの学生と実験や食事を共にする中で文化や研究を尊重、刺激し合い、帰国後の研究に対し多角的に取り組む姿勢を得ました。また、現地日本企業の工場見学では、日本とは違う主力製品や生産現場のこだわりを直接伺うことができました。

⑫本田研 杉浦伸明 派遣先（カセサート大学）

私は海外に対して漠然とした不安を抱えていましたが、本留学により払拭することができ、知らない世界に飛び込む楽しさを知ることができました。本留学は、注意する点を抑えれば誰でも楽しく過ごすことができるものだと確信しています。

⑬藤山研 高崎美桜 派遣先（カセサート大学）

この度はご支援を頂きありがとうございました。異文化あふれるタイでの生活は刺激的で、タイ語で“気にしない”という意味の“マイペンライ”の思考のもと、違いを受け入れる柔軟性を養いました。今後も広い視野を持って新たなことに挑戦し続けたいです。

⑭藤山研 田中溪太郎 派遣先（カセサート大学）

蚊を扱ったマラリアの研究、美しい遺跡や寺院、美味しい料理、ムエタイ体験、様々な異文化とたくさんの人の優しさに触れた35日間。感染症などトラブルもあったが、それらも含め、忘れることのない貴重な思い出。

⑮本田研 土居拓実 派遣先（マヒドン大学）

日本人は親切だという話を聞きますが、タイの人たちの前ではそんなことを言えないと思いました。私の拙い英語を真剣に聞き、理解しようと努め、さまざまな経験をさせてくれました。私もこの親切心をもって、日本に来た留学生と交流しようと思いました。

⑩内山研 岩本菜々 派遣先（マヒドン大学）

私はマヒドン大学の理学部に行きました。研究室には大阪大学の名前が入った機器が多数あり、留学で心細い中安心できました。大学の日々はとても充実しており、行って良かったと、心から思っています。ご支援いただいたことを心より感謝申し上げます。

⑪渡邊研 大谷有佳 派遣先（マヒドン大学）

情報交換のツールとして日常的に使われる英語と、現地の学生の研究への熱意に刺激を受けました。現地での体調不良や研究生活を乗り越えた経験は、自信に繋がりました。温かいご支援ありがとうございました。

⑫蛋白研 小澤健太 派遣先（マヒドン大学）

タイでの1ヶ月間で非常に濃厚な体験をすることができました。研究だけではなく、現地の方々との交流することで文化の理解をしたことに大きな意義があったと思います。このフィールドスタディをサポートしてくださった尚醸会の方々に感謝申し上げます。

⑬大政研 佐渡友大輝 派遣先（マヒドン大学）

マヒドン大学にて、高がん物質探索に関する研究活動を行ってきました。微生物の扱いやインリシコでの実験は初めての経験でしたが、タイの学生や先生はとても優しく教えてくださり、タイの方々の優しさには毎日助けられました。ありがとうございました。

⑭藤山研 須河内健太 派遣先（マヒドン大学）

今回の留学では、現地の風習や食文化を肌で感じ、自身の見聞を広めることが出来ました。また、英語での交流に関しては、文法の正しさよりも会話をする意思の方が大切であると感じました。この経験を活かし、今後の生活を有意義なものにしていきたいです。ご支援ありがとうございました。

⑮大政研 吉池知安留 派遣先（マヒドン大学）

タイのマヒドン大学にて、タイで生育されている植物がヒト肝臓由来の細胞においてカドミウム毒性を軽減しうるかどうかという研究を行いました。初めての外国で、目に映るもの全てが新鮮で楽しい1ヶ月でした。

令和5年度 同窓会会計

収入	令和4年度より繰越金	3,008,863 円
	令和4年度会費（ゆうちょ振込）	279,334 円
	令和4年度会費（コンビニ振込）	313,400 円
	バイオテクノロジーセミナー会費	209,000 円
	受取利子	21 円
	合計	3,810,618 円
支出	吉田先生ご葬儀供花	22,000 円
	名簿データ整理委託費	66,000 円
	会報、チラシ、発送費	181,500 円
	会報持込発送費	288,383 円
	二年生重要事項説明会懇親会	50,154 円
	バイオテクノロジーセミナー旅費	130,000 円
	バイオテクノロジーセミナー懇親会	219,900 円
	尚醸賞賞状・楯作成費	17,837 円
	ゆうちょ Biz 利用料	13,200 円
	利用料（ゆうちょ銀行）	14,502 円
	合計	1,003,476 円
収支	（令和6年度への繰越金）	2,807,142 円

令和5年度 学生国際活動支援金会計

収入	令和4年度より繰越金	3,439,073 円
	受取利子	30 円
	合計	3,439,103 円
支出	SSSV フィールドスタディへの支援金	360,000 円
	合計	360,000 円
収支	（令和6年度への繰越金）	3,079,103 円

証明書

令和五年度大阪大学工学部醸造醗酵応用生物工学科同窓会（尚醸会）の会計資料（収入・支出内訳、領収書、預金通帳）および、学生国際活動支援基金の会計資料（収入・支出内訳、領収書、預金通帳）を監査したところ、正当妥当であることを証明します。

令和六年 5 月 20 日

大阪大学工学部醸造醗酵応用生物工学科同窓会（尚醸会）
会計監査人

証明書

令和五年度大阪大学工学部醸造醗酵応用生物工学科同窓会（尚醸会）の会計資料（収入・支出内訳、領収書、預金通帳）および、学生国際活動支援基金の会計資料（収入・支出内訳、領収書、預金通帳）を監査したところ、正当妥当であることを証明します。

令和六年 五 月 二十 日

大阪大学工学部醸造醗酵応用生物工学科同窓会（尚醸会）
会計監査人

Web 版のため印章部分を削除しました。

大阪大学工学部 醸造・醱酵・応用生物工学科同窓会「尚醸会」会則

1. (名称)

本会は「尚醸会」と称する。但し、本会の預金口座名は「醸造・醱酵・応用生物工学科同窓会」として取り扱うものとする。

2. (会員の構成)

本会は次の会員で構成する。

(1) 正会員

イ 大阪大学工学部、同大学大学院工学研究科ならびにその前身である学校の醱酵・生物工学系の前身学科、専攻の卒業生。

ロ 上記イの教室および付則に示す関連講座の旧教官・教員、現教員および現職員。

ハ 上記イの教室および付則に示す関連講座に関係のあるもの（旧職員、研究生、実習生など）で、入会を希望し会長が承認したもの。

(2) 名誉会員

会員の中から第6条に定める役員会の推薦により総会の承認を得たもの。

(3) 賛助会員

本会の趣旨に賛同し、付則に定める会費を納めるもので幹事会の推薦により総会の承認を得たもの。

(4) 学生会員

大阪大学工学部応用自然科学科バイオテクノロジーコースおよび同大学院工学研究科生物工学専攻生物工学コースに所属する学生。

3. (目的)

本会は会員相互の親睦を図り教室の発展に寄与することを目的とする。

4. (所在地)

本会の所在地は大阪府吹田市山田丘2番1号 大阪大学大学院工学研究科生物工学専攻内とし、会員の希望により支部を設けることができる。

5. (役員)

本会には次の役員を置く。

- | | | |
|---------|-----|------------------------|
| (1) 会長 | 1名 | 正会員の中から総会で選出する。 |
| (2) 副会長 | 2名 | 正会員の中から会長が推薦し、総会で承認する。 |
| (3) 幹事長 | 1名 | 正会員の中から会長が委嘱する。 |
| (4) 幹事 | 若干名 | 正会員の中から会長が委嘱する。 |
| (5) 監査 | 2名 | 正会員の中から総会で選出する。 |

6. (役員の仕事)

本会役員は、役員会を構成し、本会の運営を図る。役員の仕事は次のとおりである。

- (1) 会長は本会を総理する。
- (2) 副会長は会長を補佐する。
- (3) 幹事長は幹事を総括して会務を掌理する。

- (4) 幹事は庶務、財務、企画、編集の事務を行う。
- (5) 監査は本会の運営と会計を監査し、総会に報告する。
7. (役員任期)
役員任期は2年とし再任を妨げない。
8. (名誉会長)
 - (1) 本会に、名誉会長をおくことができる。
 - (2) 名誉会長は役員会が推薦し、総会の承認を得て委嘱する。
9. (会議)
 - (1) 本会は原則として2年に1回総会を開き、役員改選、会計報告、会則改正、その他重要な事項を議する。
 - (2) 総会決議には出席正会員の過半数の賛成を必要とする。
10. (会計)
 - (1) 本会運営の経費は会費およびその他の収入を持ってあてる。
 - (2) 会費は付則に定める金額とする。
 - (3) 名誉会員および学生会員からは徴収しない。また、卒業後50年以上の会員は会費を免除する。
 - (4) 本会の会計年度は4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。
11. (会則変更)
本会の会則は総会において出席正会員の三分の二以上の賛成を得て改正することができる。ただし、書面を持って賛否を表す場合は出席とみなす。

付則

1. 本会の設立日は平成8年11月15日である。
2. 生物工学系とは、大阪大学工学部応用自然科学科バイオテクノロジーコースおよび同大学院工学研究科生物工学専攻生物工学コースならびに、それらの前身とする。関連講座については、適宜役員会で協議の上、定義する。
3. 本則第9条の会費は次のとおりとする。
会費 正会員は年額2,000円、賛助会員は年額1口 5,000円。
4. 本則第4条の規定に従い、本会に関東支部を置く。
5. 付則の変更は役員会の議をもって行う。
6. 本会則は平成8年11月15日から施行する。

令和3年11月13日改訂

☆同窓会現組織（令和6年度）

会長	関 達治（昭和42年卒）	
副会長	二宮保男（昭和46年卒） 原島 俊（昭和47年卒）	
幹事長	福崎英一郎（昭和58年卒）	
幹事		
（企業幹事）	櫻井崇弘（平成17年卒）	日本盛（株）
	谷口百優（平成27年卒）	（株）島津製作所
	中島慎太郎（令和2年卒）	武田薬品（株）
（庶務担当）	梶浦裕之（平成15年卒）、岡橋伸幸（平成24年卒）、 安本周平（平成24年卒）、大橋博之（平成25年卒）	
（財務担当）	鳥巢哲生（現教員）、酒井香奈江（平成15年卒）	
（名簿担当）	大政健史（昭和61年卒）、内山 進（現教員）、 Sastia Putri（平成22年英語コース卒）	
（編集担当）	戸谷吉博（現教員）、山本 陸（平成27年卒）、川本晃大（現教員）	
（企画担当）	新聞秀一（現教員）、櫻井崇弘（平成17年卒；企業幹事兼）、谷口百優 （平成27年卒；企業幹事兼）、中島慎太郎（令和2年卒；企業幹事兼）	
監査	高松 智（昭和44年卒）、片倉啓雄（昭和57年卒）	

☆会員の動向（最近の動向がございましたなら、同窓会までご一報下さい）

●教職員の異動（令和5年8月から令和6年6月まで）

Web版では個人情報のため削除いたしました。

●会員訃報 心よりご冥福をお祈り申し上げます。

Web 版では個人情報のため削除いたしました。

●令和6年3月卒業、修了生進路等（工学研究科教務係提出資料より）

Web 版では個人情報のため削除いたしました。

Web 版では個人情報のため削除いたしました。

同窓会からのお願い

近年、企業合併や部署移動、市町村合併によって、住所変更や所属変更となる会員が増えておられます。これらに変更が生じた場合、同窓会（doso@bio.eng.osaka-u.ac.jp）までご一報ください。なお、お寄せ頂いた個人情報は、尚醸会個人情報保護方針（<https://www-bio.eng.osaka-u.ac.jp/doso/jusho.html>）に従い、適切に対応いたします。

●教室の構成（令和6年6月1日現在）

Web版では個人情報のため削除いたしました。

Web 版では個人情報のため削除いたしました。

- クラス会幹事（クラス会幹事の方には会員の所属の移動等について同窓会への連絡をお願いいたします）

昭和 23 年	佐瀬 勝	昭和 49 年	小西喜朗	平成 12 年	井戸芳博
昭和 24 年	野口祐一	昭和 50 年	中塚正博	平成 13 年	後藤優治
昭和 25 年	足立 有	〃	東浦忠司	平成 14 年	有岡伸悟
昭和 26 年		昭和 51 年	溝口晴彦	平成 15 年	新家康弘
昭和 27 年		昭和 52 年	根来誠司	平成 16 年	和田 悠
昭和 28 年（旧制）	石川正人	昭和 53 年	金子嘉信	平成 17 年	藤井健治
昭和 28 年（新制）	高野光男	昭和 54 年	高木 睦	平成 18 年	鳳桐智治
昭和 29 年	嶋谷幸雄	昭和 55 年	滝沢 昇	平成 19 年	高木康弘
昭和 30 年	大嶋泰治	昭和 56 年	阿野貴司	平成 20 年	木村修一
昭和 31 年		昭和 57 年	片倉啓雄	平成 21 年	外尾竜太
昭和 32 年	細見正明	昭和 58 年	森川正章	平成 22 年	井村 誠
昭和 33 年	中桐義隆	昭和 59 年	藤山和仁	平成 23 年	吉田真理
昭和 34 年	野本哲也	昭和 60 年	中嶋幹男	平成 24 年	吉田隆史
昭和 35 年	森元英雄	昭和 61 年	大政健史	平成 25 年	長澤宏器
昭和 36 年		昭和 62 年	山本恵三	平成 26 年	都倉知浩
昭和 37 年	菅 健一	昭和 63 年	向由起夫	平成 27 年	小幡佑季
昭和 38 年		平成元年	永尾寿浩	平成 28 年	吉富耕太
昭和 39 年	藤田正憲	平成 2 年	松本雄大	平成 29 年	花谷耀平
昭和 40 年		平成 3 年	鈴木市郎	平成 30 年	光吉祐太郎
昭和 41 年	関 達治	平成 4 年	内山圭司	平成 31 年	有島凜太郎
昭和 42 年	卜部 格	平成 5 年	滝口 昇	令和 2 年	黒田将輝
昭和 43 年	関口順一	平成 6 年	松浦友亮	令和 3 年	安倍 玲
昭和 44 年	土戸哲明	平成 7 年	永久圭介	令和 4 年	川本優一
昭和 45 年	古川憲治	平成 8 年	金谷 忠	令和 5 年	川西寿和
昭和 46 年	山本忠行	平成 9 年	小林 肇	令和 6 年	時田好典
昭和 47 年	島田裕司	平成 10 年	田中礼央		
昭和 48 年	曾根良昭	平成 11 年	永塚由佳		

- * 昭和 22 年以前は、クラス幹事不在のため省略しております。
- * クラス幹事が不在の学年は、ご相談の上、同窓会事務局までお知らせください。
- * 各学年での同窓会等の行事を開催した場合は、是非同窓会までご一報ください。その際には、簡単な概要説明と写真などを添えて頂けると幸いです。

会員各位

名簿担当からのお知らせとお願い

①大阪大学生涯メールアドレスをお知らせください。

大阪大学を卒業・修了された方に、生涯使えるメールアドレス「XXXX @ alumni.osaka-u.ac.jp」が大阪大学から提供されています。大阪大学の Web メールシステム (OUMail) を用い、インターネット環境下ならどこでも送受信でき、自動転送設定も可能です。

平成 26 年 3 月以降の卒業・修了生＝すでに利用可能です

卒業・修了時、全員に OUMail 生涯メールアドレスが設定されています (申し込み不要)。

アドレスは、卒業の翌月初めに、在学中の大阪大学個人 ID をもとに自動で切り替わっています (例: u123456a@ecs.osaka-u.ac.jp ➔ u123456a@alumni.osaka-u.ac.jp)。

※在学中のパスワード、メールデータ、連絡先などの設定は自動で引き継がれます

※大阪大学の中で進学される方には、その課程を修了後に贈呈します

平成 26 年 2 月以前の卒業・修了生＝新規発行となります

アドレスは、申込者の氏名に基づき、下記の形となります。

【姓 - 名 - 英字 2 字 (自動割り当て)】@alumni.osaka-u.ac.jp

申し込み等、詳細は下記の大阪大学の HP をご参照ください。

(<https://www.osaka-u.ac.jp/ja/campus/alumni/support/oumail>)

なお、生涯メールアドレスを取得された後、doso@bio.eng.osaka-u.ac.jp にもアドレスをお知らせ頂ければ幸いです。尚醸会からの同窓会案内等を当該アドレスにお送りさせていただきます。

②個人情報保護法の改正について

個人情報保護法の改正にともない、尚醸会の管理する個人情報も当法案の対象となりました。尚醸会では、すでにプライバシーポリシーを設定 (2009.11.13) しており (<https://www-bio.eng.osaka-u.ac.jp/doso/kojin.pdf>)、改正された個人情報保護にも対応しておりますのでご安心ください。

会員各位

2024年1月の能登半島地震では、多くの方々が甚大な被害に遭遇されましたことに心からお見舞い申し上げます。被害にあわれた方々の中には未だ復興途中の方もおられると考え、能登半島地震で被害にあわれた会員の方々からは令和6年度年会費を徴収しないことといたします。振込通知票が送付されますが、お支払いいただく必要はございません。その他災害に遭われた方もご連絡くださいましたら同様の配慮を検討させていただきます。

他の会員の皆様には、下記要領で令和6年度会費の納入をお願いしております。

記

1) 払込用紙にて納入される場合

同封の払込取扱票を用いて、郵便局、コンビニエンスストアにてお振込下さい。

郵便局だけでなくコンビニエンスストアでもお振込いただける振込用紙を同封しております。用紙の変更に伴い、手数料込の金額を表示するようになっておりますが、会費（一口2,000円）および手数料に変更はありません。複数口納入いただく場合は、これまで通り郵便局でのお振込をお願いいたします。恐れ入りますが、手数料はご負担をお願いいたします。

(郵便局でのご記入内容)

払込先口座番号：00920-5-83256

払込先加入者名：阪大工醸造醗酵応生同窓会

金額：2,000円

2) 郵便貯金口座自動払込を申し込まれる場合

最寄郵便局で自動払込利用申込書に必要事項を記入の上、お申し込み下さい。

今後、毎年11月30日に貴口座より、年会費2,000円を自動引き落としさせていただきます。手続きの都合上10月15日までをお願い申し上げます。

(ご記入内容)

払込先口座番号：00920-5-83256

払込先加入者名：阪大工醸造醗酵応生同窓会

払込開始月：令和6年11月から

払込日：30日

払込の種別：会費

(注：昨年度すでに自動払込申込をされた方は新たな手続きは不要です。自動払込手続をされた方は振込用紙で振り込まないようご注意ください。)

♪♪♪♪♪♪ 同窓生のみなさまへ会費免除のお知らせ ♪♪♪♪♪♪

いつも会費納入にご協力いただきまして誠に有り難う御座います。

同窓生のみなさまは卒業後50年経過しますと会費免除となります。

令和6年度は昭和49年卒の同窓生が該当致します。会誌送付や諸行事への参加などは今までと変わりありません。今年から免除になられた同窓生及びすでに免除になっておられる同窓生の皆様には、長い間会費を納入していただきまして有り難う御座いました。今後も同窓会へのご支援・ご協力のほど宜しくお願い致します。



大阪大学工学部 醸造・醗酵・応用生物工学科

同窓会会報 第27号

令和6年9月20日 発行

印刷所 中西印刷

発行人 同窓会幹事長 福崎 英一郎 (昭和58年卒業)

〒565-0871

吹田市山田丘2-1

大阪大学大学院工学研究科生物工学専攻内

ホームページ

<https://www-bio.eng.osaka-u.ac.jp/doso/>

電子メール

doso@bio.eng.osaka-u.ac.jp